

# カンボジア 女性のヘルスプロモーションを通じた 包括的子宮頸がんサービスの 質の改善プロジェクト

JICA 草の根技術協力事業(草の根パートナー型)

PROJECT FOR IMPROVING THE QUALITY OF  
COMPREHENSIVE SERVICES FOR CERVICAL CANCER

## 健康教育チーム プノンペン市教育局との協議

健康教育と検診の対象を小学校教員まで拡大すること、および小学校教員に適した健康教育プログラム策定の為の調査(質問票を用いたニーズアセスメント調査)を実施することについて、カンボジア産婦人科学会(SCGO)カナル理事長とスン理事がカンボジア教育省に要望し、複数回の協議の結果、11月までに合意を得ました。今後、対象校、対象者の選定基準および人数、実施時期等を具体的に検討するにあたり、教育省より、プノンペン市教育局や各小学校校長との協議の必要性が示されました。

そこで、12月18日にSCGOカナル理事長、スン理事と、東京医科歯科大学の駒形朋子准教授、国立国際医療研究センター(NCGM)の小原ひろみ医師、および菊池識乃看護師がプノンペン市教育局を訪問し、副教育局長、小学校教育担当責任者、担当事務職員の3名と面談しました。

カナル理事長よりプロジェクトの概要説明後、保健省・教育省次官による合意公文書提示が行われ、調査への明確な合意が得られました。教育省から市内の全小学校校長へ本プロジェクト実施を周知することが提案され、調査・健康教育ともに、SCGOの計画・判断に基づき、プノンペン市内の全小学校を対象に実施することが許可されました。

日本と同様に異分野・省庁間での協働には少なからず困難がある中、SCGO理事長と理事による連絡・調整により、今回無事に教育省と教育局の合意を取り付けることができました。市教育局の全面的かつ明確な合意が得られたことから、仕組みの上ではスムーズに活動を進められる環境が整ったと言えます。



教育局(左列)とプロジェクトチーム(右列)

## プノンペン市郊外の公立小学校を訪問

上記18日のプノンペン市教育局訪問時に、小学校への訪問・見学を希望したところ快諾していただき、20日に早速実現する運びになりました。

SCGO スン理事、バテイ秘書、駒形准教授、小原医師、菊池看護師の5名で、副教育局長より紹介のあったプノンペン市郊外(市内中心部より車で30分程度)の寺院に隣接した公立小学校を訪問しました。教育局からの周知により訪問は非常にスムーズに進み、対応してくれた副校長に対しまずスン理事よりプロジェクトの概要を説明後、1日のタイムスケジュールや月間予定等、主に調査実施可能日程、また教員の背景等に関連する情報収集を行い、校内を見学しました。

この小学校訪問以外にも、学校保健関連NGO代表、小学校教育に携わる青年海外協力隊員、グローバルヘルス専門家への聞き取りを実施した結果、小学校教員の勤務時間は非常にタイトだが定例職員会議の時間帯であれば調査実施可能性が高い点、小学校教員でも解剖生理等の理解は不十分であること、健康教育実施時は性や婚姻状態での区分を要する点、また歴史的経緯や社会の変化から年齢層で知識量・理解力、また許容範囲に差がある点等、具体的な検討課題が明らかになりました。



教室



副校長(左奥)が対応してくださいました。

カンボジアの一般的な小学校の造りは概ねこのようになっています。



校庭



ゴミの分別も行っています



理科室

## カンボジア公衆衛生院との話し合い

11月のキックオフミーティングにおいて、小学校教員対象のニーズアセスメント調査について、前プロジェクトで工場労働者を対象とした調査を実施した際の調査協力機関であるカンボジア公衆衛生院(NIPH: National Institute of Public Health)に再度依頼をすることになりました。

そこで、12月15~16日にSCGO スン理事、駒形准教授、菊池看護師の3名でNIPHを訪問し、コンセプトノート(案)、質問票(案)について協議し、以下の方針でニーズアセスメント調査を行うことで合意しました。

### ① 調査方法等について

- ・調査対象者: プノンペン市内の小学校女性教員 100名
- ・調査場所: プノンペン市中心部および郊外の小学校、計4校程度(各校25名程度を予定)
- ・調査時期: 2020年2月~4月(カンボジア正月前までに調査終了を目指す)
- ・調査方法: 構造的質問票を用いた、インタビュアーによる対面式聞き取り調査

### ② 実施に向けた進め方

- ・1月のカンボジア倫理審査委員会へ審査申請に向け、研究計画書ほか必要書類を作成する
- ・調査実施の可否について、教育局・小学校等の関係機関との調整を行う(前述の通り12月18日に合意済)



駒形 朋子  
東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

2019年12月12日、日本では真冬のある晴れた午後、私はプノンペンに降り立った。あまりにも青くまぶしい初夏の空の下、しっとりと熱を帯びた空気に包まれ、初めてのカンボジア出張10日間が始まった。

今回の業務内容は、プロジェクト成果1「ターゲットグループが女性の健康と子宮頸がんに関する理解を深めることのできる効果的な健康教育が提供される」の活動開始準備であった。今回のプロジェクトでは、健康教育の対象者が保健省職員、小学校の女性教員に拡大される。前プロジェクト同様、検診率向上につながる健康教育実施が主眼だが、対象者の背景が異なることから、適切な内容にするためのニーズアセスメント調査から開始する。保健省職員はともかく、小学校は監督省庁が異なるため、我が国同様省庁間での調整が容易でないことは想像に難くなかった。まずは実施できる環境づくり、今回はそこからである。10日間のほとんどは、関係者の訪問、面会、話し合いとお願いに終始した。

全体を通じて私たちにおつきあいくださったのは、SCGOの研究担当 Soeung 理事である。概要は合意の上で、まずニーズアセスメント調査の方法や質問内容などについて助言いただいた。我が国でも性と生殖については必ずしもオープンではないが、伝統的な貞操観念を大切にするカンボジアでは非常にセンシティブなトピックであり、対象者の選定はもちろん「聞き方」や「聞く人」も肝要である。そこで、調査実施には Soeung 理事の教え子でもある、カンボジア国立公衆衛生院 (National Institute of Public Health) 医師の協力を得る。協力いただく医師は前プロジェクトでの調査もご担当いただいた、公衆衛生学分野の調査研究のプロである。また偶然にも東京医科歯科大学大学院の OB であり、思いがけず学食の豚キムチの話で盛り上がる場面もあった。また何といても圧巻だったのは、Kanal 学会長のプノンペン教育局での迫力ある一幕だった。小学校での活動を何となく渋るプノンペン市教育局の面々の前で、眼光鋭く「これが目に入らぬか」とばかりに取り出したのは、保健省・教育省次官の署名入りの公文書。そこから状況は一転、スムーズな受け入れ態勢が一気に整ったことは言うまでもない。あちこちにご同行・ご助力をいただく中で、SCGOの先生方の、本プロジェクトに対する熱意が常を感じられた。

このほか、現地で小学校教育や保健活動に従事するさまざまな人々にもお会いし、教育体制や教員の背景、性と生殖に関する知識や教育の現状などの聞き取りを行った。また教育局の紹介を受け、市内の小学校訪問も実現できた。我が国同様教員は非常に多忙でスケジュールもタイトであり、調査や教育実施には効率的な計画と時間管理を要すること、身体や健康は理科に含まれるが教員自身が苦手としておりあまり授業が行われていないこと、またやはり貞操観念に関連した配慮の重要性などもわかった。

長年カンボジアを見てきた方々はみな、近年の著しい発展と社会の変化を口にする。この活動がこれからの社会の変化の一要素となり、「子宮頸がん検診を受けていないなんて！」と言われる未来を描きつつ、カンボジアの女性の健康向上に資するよう精進していきたい。

このような機会をいただきました日本産科婦人科学会およびお世話になりました皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

## 婦人科医 トレーナーの能力強化に関する計画の立案



前事業フェーズにおいて JSOG から指導を受けた婦人科医師 13 名 (首都 3 国立病院) が、本フェーズではトレーナーとなり、新たに 16 名の婦人科医 (首都 5 国立病院) を子宮頸がん早期診断治療が可能な「インプリメンター (実施者)」として育成する予定です。そこで 17 日に、トレーナーがどのように新たなインプリメンターを育成していきたいかを協議しました。日本側からは名古屋大学玉内学志医師、北見和久医師、NCGM 小原医師、NCGM 春山怜医師が出席。カンボジア側からはカナル理事長、ソッティ理事、キナ医師、マリアン医師、サニン医師、ソバナラ医師が参加しました。



その結果、年 4 回の JSOG 医師の現地来訪に合わせて、カンボジア側トレーナーが①子宮頸がんに関する基礎編のミニレクチャー (前フェーズで JSOG 医師が講義した内容)、②フェーズ 1 の対象 3 病院においてコルポスコピー・LEEP の実習を行うことが合意されました。JSOG への依頼として、①②の監督および子宮頸がんに関する応用編のミニレクチャーの実施が挙げられました。応用編のミニレクチャーの内容に関しては 20 日にアンケートを実施しました。実習要件についても検討しましたが、決定には至らず将来の検討事項として先送りとなりました。

2019年12月16日より20日までカンボジアのプノンペンを訪問し、国立母子保健センター、クメールソビエト病院、カルメット病院、コソマック病院、アンドウン病院の視察や指導、ミニレクチャーなどを行いました。

2015年から2018年までの3年間行われた「工場労働者のための子宮頸がんを入口とした女性のヘルスケア向上プロジェクト」(フェーズ1)では、子宮頸がん検診の普及を出発点として、検診台帳の導入、病理部の充実、病理との連携のためのCPC開催、HPV検診の導入などが行われてきました。私がフェーズ1で初めてカンボジアを訪問した2年前は、カンボジア医師はレクチャーや指導を受けるだけの非常に受け身な姿勢が印象的でした。また、病理診断の質が低いことが根深い問題点として見受けられましたが、本プロジェクトと並行して病理医師・技師の人材育成支援のプロジェクトも入っており、その後病理の質や病理との連携改善が進められたようです。今回の派遣でCPCに立ち会いましたが、カンボジアの産婦人科医と病理医が連携して、学習的な症例の提示や、より良い治療のための提言などを行っており、受け身の姿勢から積極的な姿勢へと2年間で目覚ましい進歩を遂げていたことに大変驚かされました。

2019年11月から、前プロジェクト(フェーズ1)を発展・拡大させた「女性のヘルスプロモーションを通じた包括的な子宮頸がんサービスの質の改善プロジェクト」(フェーズ2)が始まり、今回の派遣がフェーズ2の初めての派遣となりました。目覚ましい進歩を遂げているカンボジア産婦人科医療ですが、まだまだ課題はたくさんあるようです。フェーズ1で指導を受けた産婦人科医が、彼らの後輩や若手を指導して、知識技能を拡大してくれれば良いのですが、カンボジアにはいわゆる屋根瓦式の教育の概念があまりないようです。もともとの国民性が要因なのか、または各国から様々な支援を受けており「支援慣れ」していることも要因かも知れません。自分たちでやらなくても支援者がやってくれるだろうという考えがあるようです。このフェーズ2では、カンボジア産婦人科医を直接的に指導するというよりも、カンボジアの医師がカンボジアの医師を指導することを支援する、というスタンスに切り替えていくこととなりました。この話を切り出した際、カンボジア医師はそれでも他力本願な反応を当初示していましたが、最後には自分たちでやる気になっていました。

これまでの派遣で、子宮頸がんに関する基礎知識のミニレクチャーをJSOG派遣医師が行ってきており、今回は北見医師から「HPVとその関連疾患」のレクチャーを行いました。この基礎知識のレクチャーも、今後はカンボジア医師に行ってもらうことになりました。JSOG医師によるレクチャーは英語で行ってききましたが、カンボジア医師は必ずしも英語が堪能ではなく、途中途中でクメール語に通訳しながら理解を進めるような進行になります。今後は、JSOG医師が作成した英語スライドを活用してもらいながら、カンボジア医師にクメール語でレクチャーしてもらうことによって、より効率的な学習機会に進化することと思われまます。

カンボジアでは2021年に9歳女兒を対象としたHPVワクチン接種開始が予定されています。フェーズ1では、がん検診事業は工場労働者を対象に行われて来ましたが、ワクチン接種率を増やすためには小学校教員に子宮頸がんのことをより知ってもらうのが有用だということで、小学校教員を対象とした検診事業がスタートすることとなりました。順調にワクチンが接種されるようになれば、カンボジアの方が日本よりも早く子宮頸がんがなくなるかも知れないな、と感じました。

今回このような貴重な機会を賜りましたJICAはじめ日本産科婦人科学会に感謝申し上げます。また、現地でいろいろコーディネートしてくださった国際医療研究センターの春山怜先生、小原ひろみ先生、JSOGカンボジア支部員の佐野志野様、他スタッフの方々のおかげで、恙なく任務を終えることができました。皆様に改めて感謝申し上げます。

写真下：第8回臨床病理検討会(CPC)の様子



写真上：NMCHCにてDr.Sovanara(左)とCPCの打ち合わせを行う北見医師(中央)と玉内医師(右)

北見医師によるミニレクチャー



## 対象 5 病院における検診・がん登録の現況調査

12月17日～20日の日程で、対象5病院(国立母子保健センター、クメールソビエト病院、カルメット病院、コサマック病院、アンドウン病院)における検診・がん登録の現況を調査し、20日にプレゼンテーションによりSCGOに現況や課題を提示しました。フェーズ1で検診登録(紙台帳とエクセルファイル)を導入した3病院(国立母子保健センター、クメールソビエト病院、カルメット病院)は定期的に症例を入力しているものの、未入力や誤入力が多く症例数・フォローアップに課題がありました。

新対象2病院(コサマック病院、アンドウン病院)では、細胞診・組織診の検体提出台帳や入院台帳しかありませんでした。

今後、フェーズ1で検診登録を導入した3病院に対してデータ解析を技術支援し、結果を提示しつつデータ収集の意義を示していく必要があると考えられます。更に、各病院の実情に応じて最低限の必要情報を5病院で収集できるようにシステムを整えていく必要があると思われます。特に、カンボジアに2つしかないがん診療病院である、本事業対象のカルメット病院とクメールソビエト病院においては、子宮頸がんの診療状況をまとめることの重要性を伝えました。



## カンボジア保健省 子宮頸がん技術作業部会会議に参加

カンボジア保健省は子宮頸がんを優先健康課題として位置づけ対策強化を進めたい考えであり、子宮頸がん対策専属の担当官を設置しました。11月に NCGM の藤田則子医師と春山医師が担当官と面談した際、これまで定期的には開催されていなかった子宮頸がん技術作業部会会議の開催を提案および開催の支援を行いました。今回 NCGM/JSOG 関係者の来訪に合わせて、16日に会議が開催され、保健省側と援助関係者が国の計画と予定タイムフレームを確認しました。4半期ごとに当該月の第2週金曜日の開催が合意されました。次回は3月13日(金曜日)が予定されており、首都国立病院におけるがん登録が議題となる予定です。

### プロジェクトを取り巻く動き

- 12/12-20: 駒形朋子准教授カンボジア派遣
- 12/12-26: 菊池識乃看護師カンボジア派遣
- 12/13: SCGO 健康教育担当スン理事とニーズアセスメント調査実施に向けた協議
- 12/15-16: カンボジア公衆衛生院(NIPH)との協議
- 12/15-20: 小原ひろみ医師、春山怜医師カンボジア派遣
- 12/16-20: 玉内学志医師、北見和久医師カンボジア派遣
- 12/16: カンボジア保健省 子宮頸がん技術作業部会会議に参加
- 12/17: トレーナーの能力強化に関する協議・詳細計画の立案
- 12/17: クメールソビエトフレンドシップ病院(KSFH)訪問
- 12/18: プノンペン市教育局との協議
- 12/18: コサマック病院、カルメット病院訪問
- 12/18: Dynamic Pharma 社と careHPV(検査機器)購入に関する打ち合わせ
- 12/19: カルメット病院、国立母子保健センター(NMCHC)訪問
- 12/19: 第8回臨床病理検討会(CPC)開催
- 12/20: アンドウン病院訪問
- 12/20: ミニレクチャー(HPV infection and associated disease)開催
- 12/20: プノンペン市郊外の公立小学校訪問

